

取材・文／松井大助  
撮影／二村 海

米原高校(滋賀・県立)

# 英語で学んだ「コミュニケーションのあり方」や「世界の現実」を、日常に結びつけて生かしていく

「英語が好き」「英語が得意」というと「海外に行くときや英語の記事を読むのに役立つね」といった話になりがちです。でも英語を通して学んだことはもっと普遍的に、日常でも生かせるはず。そう確信する先生の実践をご紹介します。



※撮影時のみマスクを外していただいています。

海外との文通が  
英語にのめりこむ  
きっかけでした



今号の先生

## 英語科 堀尾美央先生

大学卒業後、滋賀県の高校教員に。2校目の勤務先である米原高校は、自身の母校でもある。同校で、Skypeを活用した海外の学校の生徒との遠隔交流授業を開始、その取組が評価され、2018年度には「グローバル・ティーチャー賞」のトップ50に選出された。

### 生徒に対する想い

英語を使って学んだことが  
日常生活とつながるように

滋賀県立米原高校のある湖北地方では、日常生活で海外の人と英語で話すような機会はまだまだ多くない。同校の堀尾美央先生は、そのなかで「生徒が海外との接点をもてるようにしたい」と考えている。「グローバルな活動」というと、私立の学校を想像しがちですが、地方の公立の学校にも世界のことに興味をもつ生徒はいます。誰にでも海外にふれる機会が与えられる教育現場であってほしいのです」

その方針は生徒からも歓迎されるものだった。同校には、普通科英語コースという、英語や国際社会への興味が強い生徒が希望して入れるクラスがあるのだ。

ただ、その英語コースの生徒を含めて、日本の高校生の英語を学ぶ姿勢にはやや違和感も抱いているという。昨今はコミュニケーション中心の英語学習が増えているが、そのやり取りが授業だけのパフォーマンスにとどまりやすいのだ。

「例えば英語の授業では『会話でわからないことや聞き取れないことがあったら質問する』というやり取りをします。では普段の日本語の会話でわからないことがあったとき、生徒が質問するかというと、あまりしていません。人とコミュニケーションを取るために学んだことが、日常生活とつながっていないんですよ」

### 授業の実践

ディベートの授業で  
思考力や伝える力を育む

だから生徒には、もっと英語を「日常に生かせる」という感覚で学んでほしいと思っている。英語を学ぶことで「人とつながれるんだ」「世界のさまざまなことを知って自分の可能性を広げられるんだ」などとイメージしていけるように。「学校で学んだことが、現実社会ときちんと結びつくようにしたいのです」

現実社会とつながる学びになるよう、堀尾先生は同僚の先生と協力して、さまざまな授業の実践に取り組んでいる。

例えば、1年生の英語の授業におけるディベート。その導入では、なぜ授業で討論をするのかを、生徒にも説明するという。「正解のない問いに自分なりの解を出さないといけないとき、どの判断にはどういうメリットやデメリットがあるかを『自分で考える』。そのうえで『自分の意見を論理的に伝える』。そのための一つの方法をディベートで学びましょう」と。

授業の組立としては、まず最初の2時間で、討論テーマについて肯定・否定それぞれの側面をブレインストーミングし、生徒が自分の考えを英語で順序立ててまとめ。そのうえで、3時間目以降は、肯定側と否定側に分かれて、生徒が1対1や、ペア、チームで意見をたたかわせていく。

Policy Debate (3)

Name \_\_\_\_\_

Today's Goal

- To learn about the difference between "fact" and "opinion"
- To make attack speech (refutation) to what your partner said

<1> FACT or OPINION?

【Fact】

Something that can be proved, that actually exists, or that everyone agrees that it is true.

(Example) English is a language. / A dog has four legs.

【Opinion】

Someone's belief or judgment about someone or something.

(Example) English is easier than Japanese. / Dogs are better pets than dogs.

<2> Listening Comprehension

Kyle sensei will read 6 sentences. Listen and answer whether each of them is a fact or opinion.

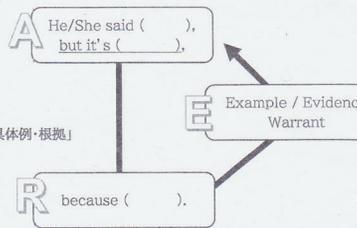
- (1) \_\_\_\_\_ (2) \_\_\_\_\_ (3) \_\_\_\_\_ (4) \_\_\_\_\_ (5) \_\_\_\_\_ (6) \_\_\_\_\_

<3> Let's make Attack Speech! \*相手の「Opinion」を狙って反論してみよう!

【反論の種類】	① not ( )	…違います
	② not ( )	…関係ないです
	③ not ( )	…いつもそうとは限りません
	④ not ( )	…大した問題ではないです
	⑤ ( )	…反対です
	⑥ ( )	…簡単に解決できます

論理的に説明する方法: 「A.R.E.A.」

- A: Assertion 「主張」
- R: Reasoning 「理由」
- E: Example / Evidence / Warrant 「具体例・根拠」
- A: Assertion 「主張」



生徒同士で討論するときのプリント。相手が述べたことは「事実」か「意見」かを区別し、「意見」に対して「それは違う」「いつもそうとは限らない」など自分の考えに合った言い回しで反論するやり方を学んだ。普段の日本語でのやり取りにも生かせる考えだ。



左の写真は、同僚の須戸先生とALTのカイル先生との討論のお手本。右の写真は生徒同士の討論。一連のディベートの授業は、堀尾先生も入れたこの3人のチームで形作ってきた。



左の写真はSkypeによる海外の学校との交流授業。右の写真は模擬国連の授業。こうした授業を行うと、生徒たちは各国の地理や歴史についても自然に興味をもつようになるという。

■ 米原高校(滋賀・県立)



School Data

普通科・理数科 / 1963年創立  
 生徒数(2020年度)707人(男子379人・女子328人)  
 進路状況(2019年度)  
 大学204人・短大2人・専門学校／各種学校11人  
 就職1人・その他18人  
 〒521-0092 滋賀県米原市西門寺1200番地  
 TEL 0749-52-1601  
 URL <http://www.maibara-h.shiga-ec.ed.jp>

Outline

「清純敦厚」を校訓に掲げる。「敦厚」とは「真心があって人情深い」こと。普通科と理数科があり、普通科はさらに2つのコースに分かれている。「普通科普通類型」は、進学から就職まで自分の進路に応じた教科・科目を学んでいくコース。「普通科英語コース」は、英語や国際社会に興味をもつ生徒がコミュニケーション重視で英語力を伸ばしていくコースだ。「理数科」では、自然科学に興味のある生徒が早くから理数の専門分野を学んでいく。

討論テーマには、「生徒が普段から疑問に思っていること」をチョイス。一つは「米原高校は生徒のアルバイトを認めるべきだ」で、このテーマで堀尾先生が肯定・否定の例文を示し、ALTとの討論の実演もした。生徒にとってわかりやすい話題にすることで、英語の難易度を抑えたと同時に、普段の日常生活でも身近な物事について考えるきっかけにしてほしいからだ。

二つめの題材は「米原高校は制服を廃止すべきだ」で、この是非について生徒が肯定や否定の立場から意見を交わした。「制服がないと服装に気を取られ、うまく勉強に集中できない人も出てくる」「小学校は制服がなかったけど、集中できない」という話はなかったのでは？」

討論を通して、事実と意見を区別し、意見に反論するというコツも学んだ。

**英語で相互の違いを知って寛容さや柔軟性を養う**

Skypeを活用した海外との遠隔交流授業も、堀尾先生が同校で始めた取組だ。初挑戦は2015年のこと。英語コースの生徒は毎年夏や冬に合宿を行うのだが、その合宿中に、NPOの協力を得て、ケニアの学校の生徒とSkypeでビデオ通話したのだ。生徒が英語で説明して「なんでやねん」という言葉を教えるなど、想定していた以上に盛り上がったという。堀尾先生はほかの国との交流も模索し、Microsoft Educator Communityと

いうコミュニティサイトを見つけ出す。そのサイトで自身の海外の教育関係者とのつながりを広げ、ベトナムやスペインなど、さまざまな国との交流を実現させた。2019年度の3年生は、教科書に「パーム油をめぐる自然破壊」の話が出てくるボルネオ島とも交流。パーム油づくりの是非について地元の子供と意見交換をし、相手から聞いた実情についてさらに質問をして、教科書だけではわからなかった現地の思いにふれることができた。

現3年生は、模擬国連の授業にも挑戦しているところだ。生徒一人ひとりがさまざまな国の立場となり、水資源や移民問題などを話し合うという授業。英語の得意な生徒ほど、日本に資料の少な

い国を担当し、おのおのがインターネットで英語の資料を探し、読み込み、その国の事情を踏まえて意見を出し合っていく。そうして英語を使って世界にふれることで、生徒には何を学んでほしいのか。教師になりたての頃の堀尾先生は、「海外の文化を知ってほしい」「世界中の困っている人のことを伝えたい」と思っていたそうだが、今はその思いが集約されてこんなふうに考えているという。「日本と海外の違いにふれたとき、相手を『異質』と思わずに『違う』ことは当たり前」と捉え、その違いを受け入れたり楽しんだりする姿勢を身につけてほしいな、と。そうした寛容さや柔軟性も、英語の授業で養っていきたいと思っています」



## 見習いたいそのチャレンジ精神 社会の課題と本気で向き合う

地歴・公民科  
藤居克幸先生

堀尾先生からは、私が社会科の教員なので、世界の地理や歴史についてたびたび難しい質問を受けています(笑)。例えば「何をもって移民なのか」「この国でこの農産物が取れるのはなぜか」といった質問で、そうした視点を、堀尾先生は英語の授業に生かされていくんですよ。

尊敬しているのは、そのチャレンジ精神と行動力。誰もが「こんなことができれば」と内心思いながら、面倒くさくて蓋をしていることから、堀尾先生は目をそむけず、できることから挑戦するんです。Skypeの授業もそうですよね。なぜそうできるのかという、自分で世界を見て感じたグローバルな課題を、米原高校というローカルな場所から本気で解決したいと思っているからでは、と感じています。

私も授業を通して、生徒が地理や歴史をしっかりと学ぶことを大前提とすうので、市民的な資質や論理的な思考力も育めるようにし、一人ひとりが社会で活躍できるよう、後押しできればと思います。

堀尾先生の英語学習の原点は、「中学生のときに始めた海外の人との『文通』」だ。雑誌に載っていた「海外に友達をつくらう」という通信講座の広告に目をとめ、興味をもって開始。欧米からアジアまでさまざまな国の人と、趣味や将来の夢を英文でやり取りした。すると英語の成績も伸びて、中学3年生になる頃には学年トップ3に入るほどになったという。

「よく覚えているのは、文通相手の手紙の文の途中に「whichやwhatが急に出てきて、何だろうと思っていたら、次の日に学校で関係代名詞を習ったことです。『これかー』と思って、自分の返事にも関係代名詞を面白がって使いました」

つまり堀尾先生は、初めから「人とコミュニケーションを取る」ことを目的として、英語を学んでいったのだ。

英語を通して、異なる考えにふれることもできた。例えば、文通をしていた男の子が「将来は核爆弾を作りたい」と手紙に書いてきたことがあったという。

「海外の人からすれば『国を守る兵器』という感覚が強いんだ、と衝撃を受けました。彼とは最近「acebook」で再会できて、『馬鹿だったよね、僕』と言っています」

大学3年生のときに、文通相手のいたスリランカに一人旅もした。内戦を終えたばかりの現地は、道も建物もぐちゃぐちゃで匂いもひどかったが、日本では報道されていなかった。同じ国内でも観光地

文通で英語力を磨き  
自分の視野も広げる

授業ができるまで

「海外の人からすれば『国を守る兵器』という感覚が強いんだ、と衝撃を受けました。彼とは最近「acebook」で再会できて、『馬鹿だったよね、僕』と言っています」

大学3年生のときに、文通相手のいたスリランカに一人旅もした。内戦を終えたばかりの現地は、道も建物もぐちゃぐちゃで匂いもひどかったが、日本では報道されていなかった。同じ国内でも観光地

は別で、白い大理石で造られたきれいなホテルは外国人観光客でにぎわっていた。堀尾先生は、こうした世界の現実を多くの人に知ってほしいと思うようになる。国際協力にも興味があったが、大学4年生の教育実習で、生徒の成長を後押しすることにやりがいを感じ、教師を志した。



### 1 「相手に伝わるか」を意識して 英語で書くことや話すことをする

ディベートでは、生徒が肯定・否定の立論を英語で記述。その添削で、堀尾先生は「(辞書で機械的に調べた)難しい単語ばかり使うのはよくない」という助言もする。「自分が知っている単語でどう表現するか」「どうやったら相手に伝わるか」を考えることも大事だからだ。文法や発音も「伝わるか」を念頭に向上を促す。

### 2 「相手を理解する」ことを意識して 英語で聞くことや読むことをする

ディベートでは「相手の言ったことを確認したいとき」や「聞き取れなかったことをもう一度言ってほしいとき」の問いかけも生徒が学び、実践する。コミュニケーションにおいては、純粹なリスニングやリーディングのスキルのほかに、あいまいな点を自ら聞き返したり、質問したりする姿勢も必要だからだ。

### 3 「英語の技能」や「世界のこと」を 内発的な動機から学びたくなる環境に

ディベートでは、題材を「制服の是非」など生徒にとって身近なテーマにして、英語の難易度を抑え、普段から物事を考えるきっかけにもしている。Skypeによる国際交流では「Yes/Noで答えられる質問で相手の国をあてるゲーム」から入り、楽しみながら地理や文化の知識も自然に深めていけるようにしている。

### 4 教科横断で先生同士で学び合い 授業で扱う内容に厚みをもたせる

英語の授業では、地理や歴史、科学、芸術など多ジャンルの英文テキストを扱う。堀尾先生は、テキスト内容に合わせて他教科の同僚の先生からも情報を集めている。こうした情報交換は米原高校では珍しくないそうで、例えば社会科の先生が、地理で扱う農業のことを理科の先生に尋ねたりもしているという。



文通相手との手紙。好きな映画やアーティスト、夢などを語り合った。カセットテープが送られてきたこともあったという。

「受験のため」「必要ない」  
そんな英語の見方を覆したい

晴れて教師となり、英語を学ぶ面白さを生徒と分かち合おうとした堀尾先生だったが、早々に壁にぶつかる。進学希望から就職希望の生徒までいた高校で、英語の授業に求められたのは、「コミュニケーション以上に」「テストや受験で点数を取る」「ことだったのだ。就職希望の生徒からは「英語はいらん」「外国の人と別にしゃべらんし」とも言われた。

自分は何のために英語を教えるのか。理想と現実のギャップに思い悩んだ。

それでも、その多様な生徒が「英語を通して自分の世界を広げられないか」と思索した。意識したのは、英語を教えるだけでなく、英語のテキストをみんなが深く読み込むことで、その内容への興味もかきたることだ。例えば海外の文化や歴史、生徒にも関わる社会の課題…。

また、Skypeで海外の学校とつなぎ、生徒に国際交流を体感させようとも構想した。残念ながら、時差の問題などでその高校在任中には叶えられなかったが、異動後の今の高校で実現にこぎつけた。

## 英語を使って考え、伝えて 自分の視野を広げていく

私は日本語とポルトガル語が話せるのですが、英語はポルトガル語と文の構造が似ているんですね。中学校の英語は、その知っている文法を習う感じで、あまり楽しめませんでした。でも今の授業は、文法を習うだけでなく「英語を使って考えて、相手に伝える」こともするので楽しいです。コミュニケーション能力がつくと思います。将来は国際連合で働きたいと思っていましたが、英語はいろいろな分野に生かせるので、今はほかの職業も調べています。ドイツ語やスペイン語も学び、多言語を話せるようになりたいです(サイトウさん)

ディベートの授業で肯定側や否定側から立論したり、相手の意見に反論したりするのは、難しいけれど、面白いです。例えば、最初は「制服は廃止すべき」と思っている、否定側に立ってみると、制服があるという理由も見つかり、「ああ、そうなんや」という気づきがあるんです。どっちの立場になっても意見を述べられる力がつくのは、楽しいし、自分の身にもなると感じています。将来の夢はキャビンアテンダントです。飛行機にはいろいろな国の人が搭乗するので、それぞれの国の文化も知ったうえで、英語を使ってコミュニケーションを取っていきたくて(渡邊さん)



左から、1年生のサイトウ ペアトリスさん、渡邊明乃さん

### 生徒はこう変わる

#### 人と通じ合うために 英語や世界のことを学ぶ

ディベートやSkypeによる国際交流を重ねると、生徒たちには「英語はやっぱ通じないとダメだ」という思いが育つようだ、と堀尾先生は感じている。

ディベートでは相手にその場で反論するため、生徒は準備したことを、発表するだけでなく「相手の言いたいことを理解し、その場で自分の考えをまとめて返す」ことにも挑むようになった。文部科学省が言うところの「やり取りする力を高めるようになったのだ。」

その英語のやり取りでは、発音や文法

がおかしくても校内の生徒同士なら日本語で補足できる。が、Skypeでつながった海外の生徒相手だとそうはいかない。通じるやり取りにしようと、発音や文法を今まで以上に意識する生徒も増えた。

英語で見聞きして感じたことを、これからの自分の学びや暮らしに役立てよう、という姿勢も見られるようになった。大学の面接試験で、英語の授業で学んだことを話した生徒が結構いたそうで、その内容というのがこんな感じだったのだ。

「教科書だけで学ぶことと、現地の声を聞いて知ることは全然違うのだと気づいた」

「ある問題について知っていることは、その人のいる地域や環境によって違う。『知識の格差』というのに気づいた」

知識の格差のことは、堀尾先生が授業で言及したわけではなく、参考までにと

配ったJICAの資料を、生徒が自分で読み込んで学んでいたことだった。

「いつのまにそんな賢いことを学んでいたのか、と驚きました(笑)。それも上辺の話をしているわけではなく、自分でふれて感じたことを基にそう言っているのが伝わってきたんです。授業で学んだことをただの教科の知識で終わらせず、日々の生活にもつなげてくれたんだと思えて、そんなときに一番やりがいを感じます」

#### 英語を通して何を学ぶか 生徒に合わせて考えたい

今後としては、堀尾先生は異動になったときのことも考えて、英語学習が持続発展していくよう、教材から指導案までしっかり残していきたいと思っているそうだ。

「教材も大事ですが、その取組で生徒のどんな力を伸ばしたくて授業をどう展開するのか、といった指導観も共有することが大事だと思っています」

異動先ではどんな授業をしたいのか。米原高校には英語コースがあり、だからSkypeによる国際交流も実現できた

と思われがちだが、むしろ堀尾先生は、どんな高校でも、同じように海外との接点を築いていきたいと考えている。

「例えば『卒業したら就職するし英語は必要ない』と思っている生徒が多い学校であれば、その生徒たちがSkypeによる国際交流で何を学ぶことができるか、そこから考えたいんです。何らかの課題があつて、そこにチャレンジするというのが、私自身、好きなのだと思えます」



#### 思い描いている授業の在り方

#### 目指す生徒像

- 相手に伝わるように、また相手を理解しようとして、英語や日本語でコミュニケーションを取る
- 英語を使って、他文化圏の人と通じ合ったり、人とつながったりする
- 英語を使って世界の多様性にふれ、固定観念に縛られない柔軟性を身につけ、自分の可能性を広げる



#### 英語の授業

##### 人と通じ合うつながる

- 相手と通じ合えるように、英語を「聞く」「読む」「話す(発表する/やり取りする)」「書く」
- 相手に通じやすい英単語や英語表現、文法、発音を習得する

##### 世界にふれる

- 授業で多様なテキストを読んだり、模擬国連で生徒自身が調査したりして、世界のことを学ぶ
- Skypeによる海外との遠隔交流授業で、世界各国で暮らす現地の人の生の声や姿にふれる

#### 他の教育活動や社会とのつながり

- HRや生活指導で、対面とネットのやり取りの違いを生徒に問うなど、普段から「コミュニケーションのあり方」を生徒自身が考えるように促す
- 英語の授業で多様なテーマを扱うことで、地理や歴史、自然科学や芸術など、他の教科と関連する教養も深める